

国際教養学部のアクティブラーニングの実例

奄美研修からみる学生の成長と仕掛け



千葉商科大学国際教養学部 教授

五反田 克也
GOTANDA Katsuya

プロフィール

2000年京都大学大学院理学研究科博士課程中途退学、2003年博士（理学）取得。千葉商科大学政策情報学部専任講師、准教授を経て2015年より現職。専門は地質学、第四紀学、古環境復元。

1 はじめに

国際教養学部では多くのアクティブラーニングの要素を含んだ授業が設置されている。これは、留学が必須であり、留学先でのコミュニケーション能力を高めることや自ら考えて行動する能力を高めることが重要であるからである。例えば、入学式直後に実施する海外フレッシュマンキャンプでは、入学式前から研修先の国の基本的事項や文化について講義を行い、現地ではさまざまな文化に触れ、自らの英語を駆使しコミュニケーションをとるといったことを実施している。特に現地の大学生との交流では共通語が英語しかない中で、英語で意思疎通をとる難しさや可能性を肌身で感じ、4年間の外国語学習のモチベーション向上を図っている。

留学をはじめとしたフィールドワークやアクティブラーニングが多く設置されている国際教養学部では、2015年の学部創設以来、「日本を知る」という学部の理念を実行するために鹿児島県奄美大島での研修を行っている。国際教養学部では、留学を前提としたカリキュラムを設計するにあたり、いきなり国際化ではなく、最初に自分たちの住んでいる日本のことを多方面から理解することを重要視した。それは、海外で活

躍するにあたって世界のことを知るだけでは不十分であり、日本のことを知っていることが重要であるだけでなく、留学中に外から日本をみることであらためて日本の良さ、特徴、課題を理解することが重要だと考えているからである。

「日本を知る」と言っても、その「日本」とはどこなのかということが大きな問題として立ち上がる。特に本学部の学生の多くは、千葉県や千葉県隣接の東京都東部や埼玉県南東部の出身者が多く、彼らの語る「日本」とはおのずと東京周辺のことに限られがちである。東京は日本の首都であり、多くの人が集中し文化の発信地としても機能しているが、あくまで「日本」の一地域であり、これだけで「日本」を語るのは大きな問題を含んでいると考えられる。

そこで、「日本」という国をより深く理解するために、東京のもつ特徴とはもっとも離れていると思われる離島という地域を選択し、地方の抱える問題、離島という特殊な環境の抱える問題を考え、そこがもつさまざまな特徴を未来にどう繋げていくのかをフィールドワークから学ぶ研修を設置することとした。

研修先として鹿児島県の奄美大島を選定した。沖縄県の島々とも違い九州や本州とも違う文化をもち、8つの有人島からなる奄美群島の中で最も大きな島である奄美大島では、固有の生物や独特の生態系から多くの学びを得ることができると考えたからである。2泊3日の研修では、学生はさまざまな施設を見学するだけでなく、自然などを観察し写真に収め、奄美大島の気になるところについて人々に質問をし、自らの問いを解決していくことを実施することとした。

研修は2泊3日で実施し、事前講義と事後講義で構成される。実施時期は年度によって変遷しており、2015年度は奄美大島が梅雨の開ける6月末に実施したが、1

年次の授業計画や学生生活の関係から見直し、2016年度からは秋学期の実施とし、11月の3クォーターと4クォーターの間に実施をしている。コロナ禍になった2020年には、1年生は入学式直後からオンラインによる講義となったが、奄美研修は秋に無事に実施することができ、この奄美研修で初めて顔を合わせる同級生がいて親睦が深まるなど、学習以外にも多くの意味をもつ研修となった。2021年度からは海外渡航が難しい状況もあり、フレッシュマンキャンプの代わりに奄美研修を入学式後のオリエンテーション期間中に実施している。



写真1 奄美パークでの宮崎園長による講演

2 奄美とは何か

本研修は、広く日本という国を捉え、その特徴や課題を考えることを主眼としている。日本という国を考えたときに、東京や大阪などの大都市だけで語ることはできないし、観光地のことを語るだけでも不十分である。特に日本は7,000もの島からなる島国であり、400ほどの有人島に人々が暮らしており、そのような離島での生活や自然環境について知ることは重要であると考えられる。ひとえに離島といっても、淡路島のように本州などと橋を通してつながっており、多くの人が生活している島もあれば、八丈島などのように東京からの直行便の就航している島もある。沖縄のように高度に観光地化され、国内外から多くの観光客が訪れる島もある。

このように多くの島からなる日本では、島によって文化や自然環境が異なることが多く、その多様性が特徴である。本研修では、多くの島の中から鹿児島県の奄美大島を研修先として選定したが、その理由は大きく次の5点になる。1. 「日本」の地域の中では歴史が複雑である、2. 九州とも沖縄とも違う独特の文化、3. 世界遺産となった豊かな自然、4. 独特の生態系と多くの固有の生物、5. 島の環境を生かした産業、である。

奄美大島をはじめとする奄美群島は、奄美大島、喜界島、徳之島、加計呂麻島、沖永良部島、与路島、請島、与論島の有人島8島からなる。奄美群島とはいっても、それぞれの島には独特の特徴がみられ、例えば、「ありがとう」という言葉をみても、奄美大島では「ありがさまりよーた」、徳之島では「おぼだられん」、喜界島では「うふくんでーた」、沖永良部島では「みへいでいろ」、与論島では「とーとうがなし」といったように異なる。また、徳之島は子宝の島として有名であり、現在の日本で特殊出生率が2を超えるまれな存在である。

奄美大島は、東京から1,400km程度の距離にあり、鹿児島と沖縄本島とのほぼ中間に位置している。奄美群島の中心として機能しており、5つの市町村から構成されている。人口は6万人余りであるが、地方の例にもれず人口減少と少子高齢化が進んでいる。東京からは、かつては羽田空港発の日本航空の直行便しかなかったが、日本でLCCが設立されると、Vanilla Airが成田空港からの直行便を就航させ、利便性が大きく向上した。奄美空港は周辺の島々へのハブ空港としても機能している。物資の輸送はフェリーが中心であり、鹿児島から奄美大島を経由して沖縄の那覇へ向かう便などが設定されている。

また、沖縄本島のように観光地化が進んでいないため、豊かな自然が多く残されてもいる。2021年には沖縄県と共に世界自然遺産に登録された。海には珊瑚礁が広がり、潮間帯には日本で2番目の広さをもつマングローブ林が広がっている。砂浜にはウミガメが産卵に訪れる。陸上には毒ヘビのハブを頂点とする生態系が形成されており、島の成り立ちを反映した固有の生物が多く生息している。亜熱帯林が広がり、金作原には日本で最大のシダ植物であるヒカゲヘゴの群落が見られる。

歴史的には、奄美群島は複雑な経緯を得てきている。その歴史は苦難に満ちたものであり、近代日本を支えた歴史でもある。奄美群島が歴史上、文献に現れるのは古く、7世紀頃には「ヤマト」の中央政権に認識されていたと思われる。奄美群島で取れる夜光貝が中央政権に献上されたとの記載が見られる。15世紀には沖縄本島に成立した琉球王国による侵攻を受け、その支配を受けることになる。琉球王国の時代には琉球文化が導入され、現在でも「ノロ」という巫女のシャーマニズム文化などが残っている。

江戸幕府が成立すると、薩摩藩は琉球王国への侵攻

を開始する。この時、薩摩藩は琉球王国の独立を保ちつつ、その一部であった奄美群島については、江戸幕府に対しては琉球王国のものとしつつも、実質的な支配権を割譲させている。江戸時代を通して奄美群島は薩摩藩による植民地的な支配を受け、島民の生活はさまざまな制約を受けることになった。農業ではコメではなくサトウキビ栽培を強要され、不平等な条件での取引が行われ、島民の生活は困窮した。このサトウキビの栽培は、当時の日本では薩摩藩だけが独占している事業であり、薩摩藩はこのサトウキビ(黒糖)による商売で莫大な財を築いており、この収入が幕末における薩摩藩の活動を大きく支えることになったといわれている。

明治維新後、沖縄とともに奄美群島は「日本」の一員となるが、第二次世界大戦後には再び「日本」から離れ、今度はアメリカによる統治を受けることになる。戦後、アメリカは北緯30度以南の島々を直接統治した。奄美群島では、本土復帰の運動が盛り上がり、島民一丸の陳情活動の成果もあり、沖縄県よりも早い昭和27年に復帰し再び「日本」となった。

奄美群島は、その歴史的な経緯から独特な文化を保持している地域である。沖縄を中心とする琉球の文化の要素もあれば、本州や九州のヤマトの文化もみられるが、琉球ともヤマトとも違う文化をもっている。奄美大島だけでも、地域によって踊りや島唄が異なるなど島の環境を反映した特徴がみられる。奄美大島を代表する文化としては、世界三大織物の一つとされる大島紬が挙げられ、かつては奄美大島の一大産業として繁栄を築いてきた。また、食文化では鶏飯やあぶらぞうめんなどが代表的である。

このように、「日本」にありながら独特の文化や豊かな自然環境を持つ奄美大島は、「日本」という国を理解するには適していると考えられる。さらに、島の大きさに対して調査対象地点間の距離が近く、短時間に多くの調査が可能であること、調査時にインタビューする対象となる人が限られるために協力を得やすいことなど、フィールドワークを円滑に行うための諸条件が整っていることも奄美大島に決めた大きな理由である。

3 講義の方法

奄美研修は、2単位科目として設置されている。学部設立当初は国内短期研修、カリキュラム改定後は国

際教養学概論Ⅲとして運営している。現地での2泊3日の研修と関連して、事前の奄美の概要や調査方法についての講義と、事後の発表を中心とした講義を行っている。現地での行動、調査は4名のグループで行い、調査項目の決定や発表もこのグループ単位で行う。

事前講義は概ね7つの内容の授業を実施している。2022年度の内容は、1.研修の意義、2.奄美の概要について反転授業、3.奄美の自然環境、4.グループワークの手法、5.インタビュー調査の手法、6.グループワークでの調査内容の決定、7.ゲストスピーカーによる講義である。事前講義の特徴は、大学1年生であることを踏まえ、研究の手法であるインタビュー調査についての基本的な事柄を教えている、グループワークを円滑に進めるための手法や作法を教えている、ゲストスピーカーによる現場からのレクチャーを受ける、の3点である。

インタビュー調査の手法の講義では、人に質問するときの基本的な姿勢やマナーから、その質問がオープンであるのかクローズドであるのかなどについて教えている。特に、短時間しかない場合にどのように答えを聞き出せばよいのか、効果的な質問の方法について重点的に教えている。

グループワークの手法は、そもそもグループワークとは何かという点が重要としている。仲の良いもの同士で楽しくワイワイするのではなく、限られた時間内に効率的にもっとも効果的なアイデア、考えを出すことが重要であると教えている。当然ながらサボらない、迷惑をかけない、積極的に参加するなどについても指導を行っている。

ゲストスピーカーによる講義では、設立当初より行っているのが航空会社による講演である。国際教養学部に入學してくる学生の中には、将来の進路として航空業界や観光業界を考えている者が一定数いるため、航空会社の仕組みや使命について説明をいただいている。本研修ではLCCを利用しているため、設立時には成田空港においてVanilla Airから講義をいただき、Vanilla AirとPeach Aviationとの合併後にはPeach Aviationに講義をお願いしている。ANAやJALといったフルサービスキャリアと違い、LCCにはLCCなりの企業運営の仕組みがあることや、航空会社として地域創成への協力など社会貢献についても講義を行っている。

コロナ禍によりオンラインでのつながりが普及した現在は、奄美大島の方によるオンライン講義も実施している。2022年度は、奄美大島の大島紬村の会長に

奄美の文化や歴史についての講義をしていただいた。奄美大島の盛衰を体験してきた人による歴史の講義は、一つ一つの項目が重く感じられ、苦難の歴史をより詳しく説明していただくことができた。

事後講義では、現地調査から帰ってきてから調査した事柄をまとめ、発表を実施している。現地研修が11月の実施時には、1Q2Qの授業で基礎的な発表のスキルが身に付いていることもあり、ポスターセッションを実施した。各グループがA0サイズのポスターに研究成果をまとめ、1号館1階に掲示し、コアタイムを設定して質疑応答を行った。ポスターはコアタイム以外にも1週間掲示していたため、他学部の学生や教員にも見ていただいたことだと思われる。また、何名かの他学部の教員からコアタイム中に質問をいただいたようで、学生は緊張しながらも良い経験ができていた。

コロナ禍により現地研修を4月の入学式直後とした2021年度以降は、学生のアカデミックスキルが高くないこともあり、ポスターセッションではなく、動画撮影による発表としている。発表方法も、パワーポイントによるスライド作成ではなく、スケッチブックへの手書きにより作成したフリップを使った簡易的なものとした。自らの姿を撮る動画撮影には慣れている世代ということもあり、どのグループも工夫を凝らした動画を作成している。

4 現地研修

2泊3日の行程による奄美大島における現地研修は、奄美の文化、自然を体験し、それらに関係のある人々へのインタビュー調査などを実施できる施設を中心に組み立てている。また、利用するフライトのスケジュールにより現地での滞在時間、利用可能時間が変化するため、多少のアレンジが加わる。

訪れる施設としては、奄美パークおよび田中一村美術館、奄美海洋展示館、大島紬村、原ハブ屋、奄美マングローブパーク、黒糖焼酎製造の蔵元が中心である。また、宿泊施設内では島唄や八月踊りのゲストを招いて体験をしている。以下に代表的なものをまとめる。

奄美パーク

奄美パークは、国際教養学部の前学部長である宮崎緑教授が園長を勤められている鹿児島県の施設である。奄美大島だけではなく奄美群島全体について紹介する

展示が充実している。奄美の8島の特徴を展示しており、奄美全体について知ることができ、文化や自然についての理解を図ることができる。奄美空港から近いこともあり、多くの観光客が訪れる奄美の入り口として機能している。また、奄美パークには田中一村美術館も併設されている。奄美パークでは、園長の宮崎緑教授から奄美大島の概略と国際政治学的に見た奄美の重要性についての講義を行っている。講義終了後に、学生はパーク内の職員などに自らのグループの研究テーマに関するインタビュー調査や関連する展示物の記録を行ったりする。

奄美海洋展示館

奄美市の大浜海浜公園に設置されているサンゴ礁の生態系を中心とした展示施設である。サンゴ礁の配置された水槽の中には奄美大島に産卵におとずれるウミガメが泳いでおり、奄美の豊かな海が再現されている。また、2011年に発見された海底の砂に不思議な模様を作るアマミホシゾラフグに関する展示もある。展示館のホールでは、奄美の自然に関する専門家による講義を行っており、世界遺産に至る過程を踏まえた奄美の豊かな自然とその保護についてレクチャーを受ける。講義後には学生たちが熱心に質問をしている。

大島紬村

奄美大島の伝統工芸である大島紬の製造元であり、製造工程を見学することで、大島紬がなぜ世界三大織物の一つとされるかが理解できる場所である。大島紬は、繊細で丈夫であるが、それは複雑で長い工程が必要であるからである。大島紬は、先に糸に柄をつける先染めをする織物であるが、この柄をつける染色作業も時間がかかるものである。さらに、先染めされた糸を順番通りに織り上げて柄を再現するため、緻密な作業を地道に進めていくことが必要である。本研修では、大島紬の製造工程を見学するとともに、染色作業の中心である泥染の工程を体験し、各自がオリジナル柄に染めたハンカチの製作を行っている。

泥染は、大島紬を特徴づける染色方法である。鉄分の多く含まれている「泥田」に繊維や布を漬け込むことで、大島紬独特の黒い色合いを出すことができる。この泥田の中に学生は素足で入り、自らのデザインしたハンカチを泥田に漬け込む作業を体験する。イメージしていた柄が再現できているかどうかは染色が終わるまでわから

ず、偶然にも美しい模様のハンカチができることもあれば、当初思い描いていたデザインとはまったく違うものができるがったりと学生は楽しみながら取り組んでいる。



写真2 大島紬村にて泥染体験(2020年度)

原ハブ屋

奄美大島の陸の生態系の頂点にある毒蛇のハブについて解説をしている施設であり、ハブの危険性だけではなく、生態系での役割や奄美の生活の中でのハブについて解説していただける。ハブは沖縄など南西諸島に分布しているが、奄美大島の北にある渡瀬線という生物境界で九州側の「マムシ」と分布が分かれている。また、南西諸島の島々の中でもハブの分布する島とハブが生息していない島があり、この分布の違いは南西諸島の成立過程に要因があると考えられている。奄美大島ではかつて、ハブ退治のためにマングースを導入したが、そのマングースが野生化して島の貴重な動物を捕食してしまうという事態を招いた経験がある。現在ではマングースの捕獲が進み、個体数が減少しているが、島という小さく閉じた環境では安易に外来の生物を移入することは、島の環境そのものを破壊しかねないという大きな教訓を与えている。

マングローブパーク

奄美大島には、沖縄県の西表島に次ぐ日本で2番目の規模のマングローブ林が発達している。島の中心にある住用川の河口付近に広がっており、マングローブパークでは、カヌーによる川からの観察が可能である。マングローブ林は、潮間帯に成立するヒルギ科の植物を中心とした森林で、潮の満ち引きによる環境の変化に対応した生物が生息している。マングローブ林は、陸側からでは潮間帯という特殊な環境が見えず、森の中を歩いて水面まで向かうのは困難が伴うため、カヌーにより水面側から

の観察ができることは重要である。学生はカヌーを漕ぎ観察ポイントまで向かい、植物の形状や動物を観察する。



写真3 奄美マングローブパークにてカヌー体験(2017年度)

奄美の文化体験

奄美の文化として象徴的なものは八月踊りと島唄である。八月踊りは旧暦の8月に収穫を祝って踊られるもので、みなで輪になって踊り、時には夜通し踊り続けることもある。島唄は奄美の民謡であり、奄美の生活を歌ったものや祝い唄などさまざまなバリエーションがある。八月踊りも島唄も奄美大島の集落によって違うものがあり、踊りや歌によって出身地がわかるという。コロナ禍前には、踊り手と学生が一緒になって踊り交流していたが、コロナ禍以降は踊りを見る体験となっている。



写真4 八月踊り体験(2016年度)

5 アクティブラーニングの要素と仕掛け

本研修では、アクティブラーニングの多くの要素の取り入れており、大学での学びに必要なスキルの導入部分を担っている。自発的な学びへと誘導するための反転授業、グループワーク、フィールドワーク(インタビュー調査)、発表、と学生が大学4年間で学ぶこと、それらの成果発表に必要なスキルを満遍なく配置し、効果的な学習を目指している。

反転授業として、事前授業の中で先に課題を提示し、その課題の答え合わせをしながら解説を行っている。奄美に関する Web 上のさまざまな情報元を提示し、その

情報を参考にして奄美に関する問いに答えさせている。学生は問いに対する答えを探すため、多くの情報元をみることとなり、結果として自らが探したい情報以外の情報も目にすることになり、より広範な情報を手に入れることが可能である。また、授業における答え合わせ時に図表や写真を用いて丁寧に解説するとともに、現地研修中に訪問する場所との関係について触れることで、現地での学習へのモチベーションを上げることが可能である。

グループワーク

現代の社会人にはコミュニケーションスキルが強く求められる傾向がある。本学部では2年次に留学があるため、留学先で効果的に学習を行うためには現地の人々とのコミュニケーションが欠かせないこともあり、コミュニケーションスキルの向上を図る取り組みを行っている。特にグループワークは就職活動時にも求められることが多いが、一般的に学生はグループワークをする機会も少なく、その方法についても教わるのが少ない。そこで、国際教養学部では、1年次3Qにグループワーク入門という授業を設定している。奄美研修でもグループワークの要素を取り入れているが、導入的な要素を強くしている。これは、グループワークとはどのようなものなのか、どのように運営するのかといった基本的なことを学び、グループワークの円滑な進め方を体験することを重要視しているためである。

奄美研修のグループワークは、グループワークとは何かという講義部分から始まり、実際にグループに分かれて問いに答えを出すというクイズのような形式でメンバー間のアイスブレイクを行っている。講義では、グループワークとは話し合いではなく、グループでよりよい答えやアイデアを出す作業であり、全員の参加が必須であると教えている。これは、グループワークによる調査などを実施すると、毎回のようにサボる人や発言をしない学生が出現するためである。また、司会の配置やタイムキーパーの役割などグループワークを円滑に進める方法についても教えている。

実際のグループワークは1グループ4人程度で実施している。グループワークは、人数が多くなると運営が難しくなり手を抜く人も出てくるためである。また、このグループは現地での行動も同じとなる。グループで奄美大島で訪問する場所の何について調べるのかをそれぞれの関心のあるものを列挙しながら議論し、

もっとも興味深いものを選択する。テーマに沿って現地で調査する項目、インタビューする場所や対象について計画を立案する。現地では、グループで協力しながら効率的に調査活動を行い、観察や写真撮影、インタビュー等を実施する。グループでの作業を徹底させているため、現在では手を抜く学生は少なくなり、多くの学生がグループワークを楽しむことができている。

フィールドワーク

現地研修では、多くの施設でフィールドワークをする機会が用意されている。これは奄美の方々の協力があって成り立っているものである。学生たちは、積極的に行動しインタビューを実施するなど自発的な活動がみられるようになった。解説を聞く時などもメモをとる姿をみるようになった。また、天候などによりスケジュールが変更になる、調査予定の場所に対象となる人がいないなど、当初の計画の通りに調査が進まない場合にも、柔軟に計画を変更して調査を行うことができるようにも考えている。授業開始当初には、手を抜く学生もみられたり、調査も最低限のことしかしないグループがあったりしたが、現在はほとんどのグループが意識を高く持ち行動している。



写真5 海洋展示館にてインタビュー（2021年度）

発表

国際教養学部では、学生の発表の機会を多く設けているが、奄美研修の成果発表が最初の機会となっており、学生にとっては緊張する場面でもある。ポスターセッションでは、グループでA0サイズのポスターを作成し、1週間の掲示期間を設けている。90分のコアタイムでは、教員を中心とする見学者との質疑応答が行われ、学生は自らの学びを振り返ることで理解を深めている。教員は全ポスターについて、ポスターのデザイン性や発表の精度について評価を行い、優秀なグループを表彰している。ポスターセッションは、スライドを用いた口頭発表と違い研究の全体像をつかみやすく、学生間でもどのポスター

が良いのかを評価しやすく、お互いのポスターを見比べることで成長することができる。多くの学生は、人前での発表を嫌う傾向があるが、ポスターセッションでの発表は隣にも発表者がいるので緊張感が和らぐためか、概ね全員がしっかりと説明をこなすことができている。



写真6 ポスターセッション (2018年度)

6 学生の成長

奄美研修では、さまざまなアクティブラーニングの要素を導入しており、2泊3日の現地研修に有機的に結びついた事前事後学習により、学生は積極性や計画性、協調性を身に付けることができている。本研修開始直後には、学生の意識も低くグループワークでは一部の学生に負担が集中し、現地調査では研修先に迷惑をかけるような行為が見られるなど問題があった。しかし、回数を重ねるにつれ適宜改善を行った結果、現在では学生が自主的に行動するまでに変化している。大きな改善点としては、学生の自主性に任せるのではなく、研究の形やパターンを明示して教え、それを実践させることにしたことである。学生は、何をどのようにしなくてはいけないのかを明示されたために、行動する目標がわかりそれに向かって活動を行うことができるようになったと思われる。しかし、形を教えることによる成長にも限界があり、規定内のことはできるようになるが、それ以上の成果を出そうとする意識が醸成されにくいといった問題がある。1年次の研修ということを考えれば、研究というものを実際に体験し、研究が楽しいと思っ

て今後の学生生活、勉強を行っていく意識が植え付けられれば、成果としては十分であると思われる。アクティブラーニングの要素については、学生は体験することで多くを学ぶことができているが、「日本を知る」という部分についても学生は学びをしている。多くの学生が奄美での文化等を体験し、実際に現地の人々の話を聞くことで地方の現状を理解し、日本とい

う国がもつ多様性について考えるようになるとともに、東京や自らの地元についても考えを深めることができている。特に、奄美では多くの場所を訪れているが、移動中にバスの車窓から見る風景には人がほとんど見られない。訪問先でも観光客以外には現地の人々、特に学生と同世代の人々を見るのが少なく、地方の過疎の問題や少子高齢化ということを実感している。

また、豊かな自然の残る奄美大島であるが、自然保護の難しさがあることも学習の中で学んでいる。かつて、ハブ対策のために導入したマングースが野生化して在来生物への脅威となったが、マングースの駆除により一定の成果を見せているが、現在は家庭で飼われていたネコが野生化したノネコが問題となっている。ノネコについては、マングースと違い駆除について否定的な意見や感情的な意見が多くあることを担当者から聞き、自然保護活動の難しさを知ることとなった。

学生という立場として若い世代からの建設的な意見も見られた。2018年度には、奄美に関する川柳コンテストを実施したが、島唄をラブソングと例えた詩や八月踊りをクラブと捉えた詩が作られるなど、奄美の文化を別の角度からみていることもあった。また、文化を守っていくためにSNSを活用した提案をするなど、若い感性を活かしたものも見られた。

多くの学生が奄美研修を通して多様な学びの手法を経験し、自発的に行動できるようになるなど成長しているが、隠された成長としては国際教養学部生としての意識の醸成が挙げられる。国際教養学部の2年次秋の留学に向けて、自ら学ばなければ成長しないこと、自発的に動かなければ何も得られないことを学び、留学に向けて語学等の学習をすすめていくことにつながっている。国際教養学部としての一体感、全員で勉強するという意識を作ることは大きな成果であると思われる。



写真7 ばしゃ山村海岸にて (2021年度)